

意識経験と報告可能性

——ブロックのメッシュ論証に抗して——

佐藤 亮 司

序

あなたは教室の窓からぼんやりと外を眺めている。太陽はすでに西に沈み、周りはどうどん暗くなっていく。街の灯りが一つ二つと灯っていく。あなたは大学のグラウンドの電灯がいつの間にか点灯しているのを見て、「いつ電灯が点いたのだろう？ さつきからずっと見ていたはずなのに、点灯した瞬間がわからなかった。」と思った。このようなときに、電灯が実際に点いてから、電灯が点いていることを「知る」前に、あなたは電灯が点いているのを見て」いたと言えるのだろうか。

チェンジ・ブラインドネスや不注意盲のような、心理学の実験室でよく研究された現象も我々にこのような問いを投げかける。ダニエル・デネットのような論者は、このような現象は我々の経験^①は我々が素朴に考えているほど豊かではない、ということを示す証拠であると解釈する(Dennett 1995, 2002)。そのような論者にとって、あなたが実際に何かについて報告することができなかったということは、少なくとも大人の健康な人間のケースに

においては、それを意識的に見てはいなかったということの強力な証拠になる。一方で別の論者は、「見ている」とこと「報告できる」ことは別の事柄だと考えて、我々の経験の直観的な豊かさを極力保存しようとする。そのような論者にとって、報告されなかったということは意識的に見ていなかったことの十分条件には到底なりえない。このような論者にとっては、チェンジ・ブラインドネスや不注意盲のような成果は、単に我々の報告能力と報告能力を基礎づける注意システムの限界を示しているのに過ぎず、我々の経験世界の貧しさを例証しているわけではないのだ。しかし、もし報告可能性が意識的知覚の必要条件ではないとすると、どのような条件を満たしている状態が意識的な知覚だということになるのだろうか。ネッド・ブロックのような、この立場の有力な論者による代案は、報告可能性基準を緩めた条件である。つまり、実際に報告された知覚の内容だけではなく、その時はたまたま報告されなかったが、適切に注意を向けられれば報告可能であったような内容も意識的であった、と考える (Block 2007)。近年ブロックは (Block ibid)、心理学的な成果と認知科学的な成果を網の目のように縦横に用いた「メッシュ」論証によって上のような結論を示そうとした。本論文では、このブロックのメッシュ論証を、意識経験における注意の構成的な役割を論じることで批判的に論じ、見ているということは報告できることだ、と考える立場に同意する。彼の論証の鍵となるのは、ジョージ・スパーリングの実験 (Sperry 1960) を始めとする、アイコン記憶パラダイムの実験である。ブロックによればそれらの実験は、我々の経験の内容が報告能力の容量を大幅に上回るということを示すとされる。しかし本稿では、スパーリングの実験結果の、ブロックとは異なる解釈である不確定性解釈の方がスパーリングの実験の結果のより優れた解釈であることを論じる。もし不確定性解釈が正しければ、経験の内容の容量は結局、報告能力の容量と一致することになる。

本論文では以下のように論を進める。次の第一章では、ブロックのメッシュ論法の概略を示す。第二章では、ブロックの解釈の代案となる不確定性解釈を呈示する。続いて、不確定性解釈を支持し、それに対して経験的な裏付

けを与えようと試みたジェームス・スタジッカーの議論 (Stazicker 2011) を検討し、スタジッカーの議論には重要な問題点があるが、それらは克服可能であると論じる。第三章では、不確定性解釈と同様にブロックの論証を批判する立場であり最近注目されている、イアン・フィリップスのポストデイクション説 (Philips forthcoming) について検討する。ポストデイクション説と不確定性解釈は相容れないものではなく両立しうるが、仮にそうだとしても、ブロックの論法に対する致命的な反論は、注意の働きに注目した不確定性解釈の側によってなされていることが論じられる。最後に、ブロックの立場やその他の立場からの想定される反論を検討し、不確定性解釈の足場を固めることを目指す。

第一章 ブロックのメッシュ論証

第一節 アクセス意識と現象的意識

ブロックはこれまで、アクセス意識と現象的意識という意識に関する二つの概念は、しばしば混同されがちな二つの概念であると論じてきた (Block 1995, 2005, 2007)。ブロックによれば、ある心的状態がアクセス意識的であるとは、グローバルワークスペース⁽²⁾に内容がアクセスされることによって、推論システムや実行システム、報告システムなどの様々な消費システムによって利用可能になることである (Block 2005, p.47)。一方で現象的意識については、「現象的意識とは経験である」(Block 1995, p.230) と言い換えたり、主観的な感じがあることや、ネーゲルの有名なフレーズを用いて「〜であるとはどのようなことか」性があること、などと特徴づけたりしている (Block 1995, p.230)。例えば夕日を見ているときに我々は、何とも言えぬ赤の質感を味わうが、そのような独特の

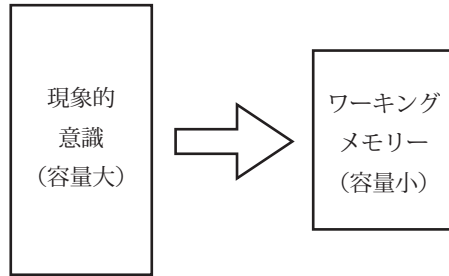
質的性質を伴った経験が、現象的に意識的な経験の典型例である。より形式的に言えば、ある心的状態が現象的に意識的であるとは、その状態が経験される性質を例化しているとき、そのときのみに限られる。

アクセス意識も現象的意識も、我々の日常的な概念了解においては紛れもなく意識の一種である。例えば我々は、雪の降る悪天の下で注意深く運転する際に、「道路の状態を意識して運転する」などと言ったりするのである。このような場合の「意識する」という語の用法は、アクセス意識的なものである。なぜならこの場合、道路の状態を意識するとは、道路の状態についての知覚内容を、適切な形で実行システムに利用可能にすることで、普段よりも慎重に運転できるようにする、ということに他ならないからである。一方で、我々が歯の痛みを意識する、というときにはその現象的側面が強調されているように思われる。この例では歯の痛みの経験、特にズキズキとしたその独特の感覚に焦点が合わされているからである。ブロックもアクセス意識と現象的意識が多くの場合共起的であることは認める。例えば、我々が道路の状態を意識して運転する場合、通常、雪と泥が混じったような状態の路面の質感が経験されているだろうし、他方で、我々が歯の痛みを意識しているときにも、通常その痛みについて考えて、歯医者に行く、痛みから気をそらすなどの様々な対策をとることができるように思われる。

それにも関わらず、アクセス意識と現象的意識の区別が重要だとされるのは、それらが単に概念的に区別可能だけでなく、現実にも乖離しうるケースがあるとされているからである。ブロックの挙げる現象的意識抜きのアクセス意識の具体例は、ほとんど思考実験の産物だけである⁽³⁾。ブロックは、他の人と全く同じように振る舞うが内的体験を欠いている現象ゾンビ (Chalmers 1998) や、より問題の少ない仮想的な事例として、超盲視 (superblindsight) を挙げている (Block 1995, p.233)。盲視患者は、彼らの盲視野に呈示された刺激についての現象的意識の存在を否定するにも関わらず、刺激の形について強制的に推測させると、偶然以上の確率で正答を与える。しかし、そのような能力を持つ一方で、彼らは推測を強制されなければ自ら視覚の内容に基づいて行為を起こすこ

とがない。その意味で彼らは十全なアクセス意識も持っていないので、現象的意識もアクセス意識も欠いている例だといえる。しかし、ブロックは普通の盲視患者とは異なる超盲視者を想像する。彼らは普通の盲視患者とは異なっていて、訓練を経て随意的に盲視野にある刺激の性質について推測を行い、それに高い信頼をおいて行為をなすのである。もしそのような者達が存在すれば、彼らは刺激についての現象的意識を欠いていた一方で、それについての思考を形成し行動を行うことができるので、十全なアクセス意識を持っていたといえる。しかし、超盲視者は、ブロックの想定とは異なっていて、決して問題の無い想定物ではないように思われる。概念的には、そもそもそのような超盲視者はむしろ完全な現象的意識も持っていると考えるべきだ、という批判がある (Dennett 1995)。また、ブロックは現象的ゾンビよりは現実的な具体例として超盲視を考案したのではあるが、実際には超盲視者の存在はこれまでには報告されていないという事実がある。

以上のように、ブロックは、現象的意識抜きのアkses意識については現実的な事例を全く提供できていない。だが、アkses意識抜きの現象的意識については、彼は現実の事例を日常的な事例、心理学的な事例、神経病理的な事例まで豊富に挙げている。本稿での議論に中心的に関わるのもこれらのケースである⁽⁴⁾。ブロックは、日常的な事例として、会話を没頭しているために、外の道路工事のけたたましいドリルの音に気づいていないという例を挙げている。会話を終えて再びドリルの音に気づいたときに、会話を続けている間もドリルの音を聞いていたという印象を持つであろう。ブロックによれば、会話をしている間のドリルの音はアkses意識的ではなかったが、現象的には意識的だったのである。また、ブロックは、視覚消去 (visual extinction) と呼ばれる症状を取り上げている (Block 2007, 482-3; 2009, 1118-9)。視覚消去の患者は、一つの対象だけがあるときは、それを見て報告することができるとも関わらず、左右同時に一ずつ対象を呈示されると、どちらかが (一般的には左側の対象が) 見えないと主張する。しかし、消失患者 G.K. の脳画像研究によれば、左側におかれた顔が見えないと彼が主張する



(図1) ブロックの考える現象的意識
と報告可能な内容の関係

ときの紡錘状領域 (fusiform area, 顔に特化した処理システムがあるとされている) の活動は、顔が見えると彼が報告するときの活動と同じくらい活発であることが分かっている。ブロックによるとこのことはアクセス不可能な現象的意識の存在を強く示唆している。また、視覚消去の患者は頭頂葉に損傷を負っているケースが多く、また頭頂葉は注意のメカニズムに関わっているので、視覚消去には注意における障害が関わっていると言われている (Vuilleumier 2000)。これらの事実からブロックは、Ckは実際には顔を見ているにも関わらず、注意が視野の特定の領域に向かないためにそれについて報告を行えないと解釈する。Ckはアクセス意識抜きの現象的意識を持っているのだ。

本稿において中心的に論じられるのは、アクセス意識抜きの現象的意識の心理学的な代表例の一つとされているスパーリングの実験である。スパーリングの実験は、アイコン記憶パラダイムと言われ、報告可能な内容を蓄えるワーキングメモリーより大きな記憶容量を持つが寿命の短い、視覚アイコン記憶の存在を示していると言われている。ブロックはその視覚アイコン記憶を、現象的意識と同一かそれに密接に関係したものととらえ、容量の大きな現象的意識の内容の一部が、報告能力の容量の制限のせいで報告されないままに留まると考える (図1)。それでは次の節でスパーリングの実験についてより詳しく見てみよう。

第二節 スパリーングの実験

スパリーングの実験 (Sperling 1960) は二つの実験から成り立っている。最初の実験である、全報告パラダイム (full-report paradigm) においては、アルファベットと数字が配列されたグリッドが短時間 (〇・〇五秒から〇・五秒) 被験者に呈示され、被験者はグリッド内に呈示された文字を紙に記すか、あるいは確かでない場合には推測することが求められる。グリッドには様々なバリエーションがあり、3から6文字で構成された一行のみの刺激や、3文字×2行、4文字×2行、3文字×3行、4文字×3行といった形のグリッドが用いられた。結果としては、被験者は刺激の呈示時間の長さ、文字の配列の仕方に関わらずほぼ一定の能力を示した。被験者は三・八から五・二個の文字を報告し、平均は四・三文字であった。(Sperling ibid., p.5)

次の部分報告パラダイム (partial-report paradigm) では、被験者が全報告パラダイムで報告することができた文字よりも多くの情報を持っていたのかどうかを検証するために、以下のような実験が行われた。ここでは、被験者は特定の行にある文字だけを報告することが求められる。被験者は五〇ミリ秒間刺激を呈示され、その刺激が消えてしまった「直後に、」音によってどの行の文字を報告すべきかを示すキューを与えられる。キューが高い音であるならば、上の行にある文字を、キューが中くらいの高さの音であるならば真ん中の行にある文字を、キューが低い音であるならば、一番下の行にある文字を報告するように被験者は指示を受ける。部分報告パラダイムでは、一行に四文字以下の文字を含む、二行か三行の刺激が用いられた。

被験者は全報告パラダイムにおける正答率よりも一貫してはるかに良い成績を残した。スパリーングは全報告パラダイムにおける報告できた文字数と比較するために、「部分報告を、被験者が利用可能な形で保持している文字の情報のランダムなサンプルとして扱う (Sperling ibid., p. 7)」ことによって、被験者によって利用可能であった文

字数を計算した。すなわち、被験者が平均して正答することができた文字数に行の数を掛け合わせることで、被験者の能力を算出したのである。その結果、4文字×3行の場合でも被験者は平均して、九・一個の文字の情報を保持しており、3文字×3行の場合にはほぼ全ての文字についての情報を持っていることが示された。

このようなスパーリングの実験結果は、我々の現象的意識についてどのような含意を持つのであろうか。スパーリング自身は多くの場合、「被験者は、刺激の」呈示の瞬間、もしくは〇・二、三秒後においては、後に報告可能な量の二、三倍の量の情報を利用することができた。」(Sperting ibid., p. 26) というように述べているように、「情報」という語を使って、意識とはやや距離を取った記述を行っている⁽³⁰⁾。確かに、スパーリングが言う通り、部分報告パラダイムで示された能力に対応するだけの、文字についての情報を被験者が持っていたのは確かであろう。しかし、我々の観点から問題になるのは、その情報が現象的に意識的なものであったのか、ということであり、それを示すには更なる論証が必要である。次の節ではいよいよ、それらの文字の情報が全て意識的であったことを立証しようとするブロックのメッシュ論証をみることにしよう。

第三節 メッシュ論証

ブロックは、もともとスパーリングの実験が端的にアクセス意識抜き⁽³¹⁾の現象的意識の存在を示していると考えていたが (Block 1995, p.243-4)⁽³²⁾、二〇〇七年の論文 “Consciousness, Accessibility, and the Mesh Between Psychology and Neuroscience” では、より心理学的なモデルとその神経科学的な基盤についての主張に踏みこんでいる。ブロックによれば、スパーリングの実験の結果は、現象的意識が報告可能な内容よりも大きな容量を持っていることを示している。そしてそれゆえに、現象的意識とアクセス意識は異なる神経基盤を持つと考えるべきだとブロックは主張

する。

ブロックによれば彼の議論は、通常の科学理論と同じように、最善説明への推論に訴えることで正しさが示される。具体的にいえば、スパリーングの実験やそれに類する実験において現象的意識の「オーバーフロー」が起きているという仮説をとることで、様々な関連する心理学的、神経科学的な証拠を説明することができ、そのような説明能力こそがその仮説を信じる理由となる、ということである。

彼の議論は主に二つの部分に分けることができる。第一の議論は、心理学的成果に関する議論であり、現象的意識のオーバーフローの存在の立証に関わる部分である。スパリーングの実験やそれに類するより最近の実験成果が論じられ⁽⁶⁾、現象的意識とアクセス意識が異なる心理学的なメカニズムであることが示唆される。第二の議論は、神経科学の成果に関する議論である。心理学的成果の解釈によつて生み出されたモデルを支持するような、神経科学における証拠の収束が見られることが論じられている。ブロックは、報告可能性を提供するグローバルワークスペースは、主に前頭葉に神経基盤を持ち、一方で現象的意識の神経基盤は後頭部にある局所的な再帰的ループが有力な候補であるとしている。このように、心理学的な成果と神経科学的な成果を縦横に、「メッシュ」のように用いて、現象的意識とアクセス意識の基盤の分離を示そうとする。

本稿で主にターゲットにされるのは、彼の心理学的成果に関する議論の部分、すなわち現象的意識に現れる内容（以下、現象的内容⁽⁷⁾）のオーバーフローの立証に関わる部分である。もし、現象的内容のオーバーフローが存在しないならば、ブロックの神経科学についての議論はそもそもスタートすることもできないからである⁽⁸⁾。さて、ブロックのオーバーフローの論証をみる前に、意識に関してニュートラルなスパリーングの実験の説明を整理してみよう。

1. 被験者は9つの文字の同一性についての情報を持っていた
2. 視覚ワーキングメモリーに送られ、報告可能な対象の情報は4つ分程度
3. どの対象についての情報がワーキングメモリーに送られるかは、適切なキューを与えて、注意を引き付けることで、操作することができる

1.に関してはすでに前節で説明した。2.については、スパーリングの実験以降ワーキングメモリーの容量については盛んに研究されており、視覚ワーキングメモリーの容量が対象4つ程度というのはかなり広く受け入れられた知見である。3.については、キューによって一時的に注意を引き付けることは心理学では常識的に行われている。

ブロックはこの説明から進んで、被験者が単に9つの文字についての情報を持っていただけでなく、被験者は9つの文字全てについての現象的意識を持っていたという結論にジャンプするために、被験者の自身の経験についての報告に訴える。スパーリングによれば、「観察者は一般に、報告できるよりも多くの文字を見ることができると主張する (Sperting ibid. p.26)」。この事実に加えて、対応する客観的な証拠を見つけることができるならば被験者の自身の経験についての報告は信頼されるべき、という比較的妥当な格率を受け入れるならば、9つの文字すべてについての現象的意識の存在が帰結することになる。そうすると、現象的意識の容量は報告能力を超えて出ていることになり、(図1)の描像が正しいことになり、現象的意識の機構とアクセス意識の機構が独立していることが言えるのだ。そうするとワーキングメモリーの神経基盤が前頭葉にある、という証拠から、現象的意識の神経基盤をそれ以外のところに探さねばならないということが示されるのである。

ここで、ブロックが比較的明示的に述べている論証を超えて、後の議論のためにもう少し深くブロックの論証を分析してみよう。「対応する客観的な証拠があるときは、被験者の報告を信頼すべき」という格率における、「対応

する客観的な証拠」とは何だろうか。現在のケースでは、もし適切に注意を向けられていれば、その文字の同一性について報告することができた、ということに他ならない。単に被験者が情報を保持している、ということだけならば、二、三個の限られたセットの中から強制選択推測を行わせた結果、偶然以上の結果を残すような場合であっても、被験者はなんらかの情報を保持していたということはできる。しかし、そのような意味での情報を保持していたとしても、被験者がその情報についての現象的意識を持っていた、とはブロックも主張しないであろう。ブロックのオーバーフロー解釈において重要なのは、注意を向けられた際に、被験者が、正しい文字を選び出して報告することができるといえる点にある。この考察はブロックの視覚消失の患者の解釈とも一致する。ブロックは、視覚消失の患者は顔についての現象的意識を持っており、注意を向けられれば、それについて報告することができただけの脳活動を持っているにも関わらず、注意の障害のために報告することができないと解釈している。つまりブロックにとっては、全報告パラダイムにおける被験者の証言、「実際に報告できるよりも多くの文字を見た」は、部分報告パラダイムにおいて、注意が特定の行に引き付けられることによって、それぞれの行に位置する文字が独立には報告できたことによって正当化される。ここで措定されているのはある種の加算的な原理である。その原理によれば、全報告パラダイムにおける経験の内容は、部分報告パラダイムにおいて、高音のキューが与えられたときの報告内容と、真ん中の高さの音のキューが与えられたときの報告内容と、低音のキューが与えられたときの報告内容との加算によって明らかにされる。このような加算が可能であるためには、少なくとも全報告パラダイムにおいて報告された経験の内容と部分報告パラダイムにおいて報告された経験の内容とが同一であることが必要である。さらに、これが成立するためには、全報告パラダイムと部分報告パラダイムにおいて注意のあり方が異なっていたことを考えれば、経験の内容と注意のあり方が独立であることも成り立っていないなければならない。だが、第三章で詳しく論じるように、この二つの前提はどちらも疑わしいのだ。

第二章 不確定性解釈、現象的内容の不確定性と注意

第一節 不確定性解釈

前章で、ブロックの論証において被験者の自身の経験についての報告が重要な役割を果たしているのを見た。しかし、被験者の報告は本当に現象的内容のオーバーフローを支持しているのだろうか。実は、被験者の証言の真理性を保存したままでスパーリングの実験を、現象的内容のオーバーフロー抜きで解釈する方法がある。それは、被験者が全ての文字を見たということを文字通り認める一方で、文字Xを経験することは、必ずしも文字Xを文字Xとして経験することを意味しないことに着目して、特定現象的内容と一般現象的内容⁽⁹⁾とを区別する立場である (Byrne et al. 2007, Grush 2007, Van Gulick 2007)。ここで特定現象的内容とは、ある文字Xをまさにその特定の文字Xとして経験しているときの現象的内容であり、一般現象的内容とは、ある文字Xを文字様の何かとして経験すること、言い換えれば特定の文字としてではなく、文字一般として経験しているときの現象的内容のことである。被験者は当然このような区別に通じていないので、単に「全ての文字を見た」と報告するが、実際には彼らは二種類の現象的内容を持っていたと考える立場である。以上のような区別を受け入れれば、オーバーフローを認めない形でスパーリングの成果を説明することができる。つまり、被験者はその文字の同一性を報告できた文字に関して特定現象的内容を持っており、そうでない文字に関しては一般現象的内容を持っていたと考えられるのである。また、部分報告パラダイムにおいては音によるキューによって、被験者の注意が特定の行に引き付けられる。その行にあった文字は、注意されることによってより特定の表象され、それによってそれらの文字の同一性について

報告することができるようになるのである。ブロックのメッシュ論証においては、全報告パラダイムにおける経験と、部分報告パラダイムにおける経験とが同一でなくてはならなかった。そうでなければ部分報告パラダイムにおいてどの行の文字も報告できたことから、全パラダイムにおいて全ての文字の現象的意識があったということが示せないからである。しかしこの解釈においては、両パラダイムにおける経験はそもそも異なっており、メッシュ論証の前提が成り立っていない。それぞれのパラダイムにおいて、注意のあり方が異なっているので、どの文字が特定に表象されていたかが異なっているのだ。

ここで特定現象的内容と一般現象的内容の区別は、ラフなものであることに留意しておかなくてはならない。一見して分かる通り、特定現象的内容と一般現象的内容の区別は絶対的なものではない。例えば、ある文字様の対象として経験することは一般現象的内容を持つことであるとしたが、単に画面に広がった黒いしみとして経験するよりは特定のである。一方で、特定の文字Xとして経験することよりもっと特定のな現象的内容も存在するだろう。単にXとして経験することよりも、ボールド体のXとして経験すること、イタリック体のXとして経験すること、あるいは印刷が少し滲んだXとして経験することの方がより特定のであろう。一般的に言って、Aという性質を持つことが、Bという性質をある仕方を持つことであるとき、性質Aは性質Bよりも特定のであるといえる。経験においては、そのような性質Aがある経験において例化されているときに、その経験の現象的内容は、性質Bが例化されているような経験よりも特定のだといえることができる。すなわち、この不確定性解釈は現象的意識の内容は豊かさにおいて程度差を持ちうるということを認める立場であり、経験の内容が特定しきれない内容を持ちうるという意味で不確定になりうることを認める立場なのである。この観点からすれば、被験者の報告が一見現象的オーバーフローを帰結するように思われるのは、経験を写真のようなものだと考えて、現象的内容を細部まで書き込まれた特定のなものだと考える誤りが犯されているからに過ぎないのである。また上で、文字は注意を受けることによ

って特定の表象されると述べたが、これも同様に正確な表現ではない。現象的意識の内容の確定性の程度差に対応して、注意の度合いにも程度差があると述べるべきであろう。つまり、より正確に言えば、特定の文字として表象されていた文字は文字一般として表象されていた文字と比べてより多くの注意を受けていた、ということである。現象的内容が、我々が素朴に抱く直観とは異なつて不確定でありうる、というのは実はとりたてて目新しい主張ではない。例えば、メルロー＝ポンティはその主著、『知覚の現象学』において以下のように述べている。

視野の周辺に在る領域は容易に記述しがたいものだが、しかし、それが暗黒でも灰色でもないことは確かである。つまり、そこには未決定の視像、何だかわからぬものの視像、というものがあるの「である」(『知覚の現象学』p.33 傍点は原文ママ)

メルロー＝ポンティは、ブロックのように、事実としては現象的内容が不確定性を多く含んでいるにも関わらず、現象的内容は細部まで充足されていると思ひ込んでしまう誤りを、「性質における第二の誤謬」と呼んで非難している。単に我々の現象的内容が不確定でありうるという可能性を超えて、メルロー＝ポンティのように、現象的内容は不確定であると考えるべき積極的な理由については、次の節で詳しく論じる。

このように定式化しても、スパリーングの実験において被験者がどの程度確定的、あるいは不確定的な現象的内容を持っていたのかを正確に述べることは難しい。しかし、報告された文字の現象的内容は、少なくとも特定の文字として報告できる程度には確定的であり、報告されなかった文字については特定の文字として報告できない程度の確定性しか持っていなかったということはでき、それだけでオーバーフローを認めない解釈としては十分である。ここでキューは刺激が消えてから呈示されたにも関わらず、どのようにして注意が現象的内容に影響を及ぼすの

か、とそもそも疑問にもたれるかもしれない。だがスパーリングの実験の結果から確実にいえることは、被験者は、全ての文字の情報をそれが意識的か無意識的かについては議論の余地があるものの何らかの形で保持していた、ということであった。不確定性解釈が正しければ、キューに基づいて報告された文字の情報は、当初は無意識的なレベルにおかれていたが、注意によって意識レベルが上がってきたことになる。そのような形でキューが現象的内容に影響に与えたとしても何ら不思議ではない。

この節の最後に、この不確定性解釈がどの程度反直観的な解釈なのかを確認しておこう。不確定性解釈は確かに被験者の報告の真理性を担保しているが、もし人々が素朴にはメルロー＝ポンティが指摘するような誤りを犯して、経験がスナップショットのように細部まで充実したものだと信じているならば、確かに不確定性解釈は、人々の現象的意識についての直観を否定しているといえる。その意味で、不確定性解釈は、デネットが唱える大いなる錯覚仮説 (the Grand Illusion Hypothesis) の一バージョンと言えるだろう。しかし、それはより穏当なバージョンである。この立場は、デネットのように人々に自らの経験についての判断の恒常的な錯誤を帰属させるのではなく、人々が経験の抽象的な構造については見誤っていたとしても、経験についての個々の判断は正しいものとして解釈することを可能にするのである。

第二節 視覚の不確定性と注意

前節では、スパーリングの実験をオーバーフロー抜きで説明する解釈である不確定性解釈を導入した。この節では、視覚と注意についての経験的証拠に基づいて、オーバーフロー論証の誤りを指摘し、不確定性解釈への経験的証拠からのバックアップを行ったスタジッカーの主張 (Stazicker 2011) を中心に検討する。彼の主張が正しければ、

不確定性解釈は少なくともオーバーフロー解釈よりも良い説明だ、ということが出来るだろう。

スタジッカーは視覚の現象的内容と注意、そして不確定性の関係について二つの主張を行う。第一に、視覚の現象的内容は本質的に不確定性をはらんでいるという主張である。先ほどから述べているように、我々は自らの経験は隅々まで様々な詳細（色や形など）に満ちていると考えがちであるが、実際に我々の意識の周縁部において存在しているのは、そのような細部を欠いた不確定な現象的内容なのである。第二に、その不確定性は注意によって影響を受けるという主張である。近年、注意が現象的内容に影響を与えるという証拠が、心理物理学的な手法によって、ニューヨーク大学のマリサ・カラスコらによって次々と提出されてきている⁽¹⁰⁾。彼女らによれば、注意は視覚的な現象的内容の様々な側面を強調する働きがある。例えば注意を受けた刺激は、そうでない刺激よりもより高いコントラストを持っていると判断される⁽¹¹⁾。スタジッカーは、このような研究の一つである、注意は視覚的解像度を増加させるというイエシユルンとカラスコの研究（Yeshurun and Carrasco 1998）に基づいて、少なくともいくつかのケースにおいては、注意は経験の確定性を増加させると論じる。視覚的解像度が増加するとそれによって、経験はより確定的な内容を表象しうようになる。スタジッカーはさらにそこから進んで、注意のそのような効果によって、部分報告パラダイムにおける被験者の報告能力を説明しようと試みる。それではこの二つの主張を順番により詳しく検討しよう。

スタジッカーが、我々の現象的内容が不確定的であると主張する最大の根拠は、視覚システムの空間解像度に限界があるからである。視覚システムの空間解像度は中心窩で最も高く、そこから周辺部に至るにつれて累進的に下がっていくが、中心窩においても、一定以上頻繁な変化は検出できないことが知られており、解像度に限界があることが示されている。現象的内容の不確定性、空間解像度の限界を示すもつとも印象深い例の一つはクラウディング効果である。クラウディング効果とは例えば、ある文字が単独では認識可能な場合でも、その他の文字に囲まれ

ることによってその文字が見えにくくなってしまいう現象のことである。例えば、ある人の周辺視野に、ある文字があり、それ自体では同定可能であるとしよう。しかし、その前後左右にそれとは異なる文字が配されると、被験者は五つの文字様のものによって構成されているということは容易に見て取れたとしてもそれぞれの文字の同一性を述べることは難しくなってしまうのである。クラウディング効果のような現象は、我々の直観とは異なって、現象的内容が未決定な要素を含んでいるということを直接に体験させてくれる。

スタジッカーはさらに進んで、注意が現象的内容の確定性を増進すると主張する。スタジッカーが、現象的内容その主な根拠としているのは、イエシュルンとカラスコの実験(1968)である。その実験において被験者は、背景とは異なる模様を検出することを求められる。被験者は一試行のうちに、一定の時間差を置いて、二回刺激を呈示され、どちらの刺激が特定の模様を含んでいたかを強制選択によって選ぶことを求められる。全ての試行の内の半分は、二回の呈示のうちの一回で模様が呈示されている位置にキューが出されている試行であり、残りの半分はキューの位置とは無関係に模様が配置されているケースであった。その結果、注意がテクスチャの位置づけられたエリアに向けられているときの方が、そうでないときよりも刺激を検出する能力が有意に高いことが明らかになった。この結果をイエシュルンとカラスコは、注意が空間解像度を上昇させたためであると分析している。

しかし、確かに注意が被験者の能力を拡張することは事実だとしても、それが知覚の内容に影響を与えた結果だとすることに対しては反論があるだろう。注意が、ワーキングメモリーへのゲートキーパーの少なくとも一つであることを考えれば、注意が向けられた領域の情報により多くの認知リソースが割り与えられた結果、このようなパフォーマンスの違いが生まれたとする解釈が自然に生じてくるからである。しかしイエシュルンとカラスコはこのような解釈は実験結果と整合的でないとして論じている。一見、解像度が高ければ高いほど分離タスクは容易になるように思われるが、一般に中心窩の近くのような解像度が高いエリアでは、模様分離タスクは実際には困難になるこ

とが知られている。これは呈示される模様のディテールが多すぎるために、一度に処理できる領域が狭くなり、その結果、背景から模様を分離するのが難しくなるためである。背景とは異なる模様を分離するには、少なくとも模様そのものより大きなエリアを探索せねばならないのである。このような事実を踏まえると、もし注意が本当に視覚解像度を増すならば、中心窩のそばではさらにタスクの能力を低下させるはずである。一方で、もしこの効果が純粹に認知的であるならば、このような中心窩と周辺部との非対称性は起こらずに、視野内のどの領域でも検出能力を向上させるはずである。結果は、イエシュルンとカラスコが予想した通りであった (Yeshurun and Carrasco 1998, p. 73 Figure 2a)。

この、注意による現象的内容の解像度の増加という事実は、オーバーフロー論証と不確定性解釈についてどのような含意を持つであろうか。スタジツカーは、これがオーバーフロー論証を拒否し、また同時に不確定性解釈を支持する論拠になると考えている。この事実は第一に、第一章の最後で論じた、ブロックの「注意を向けられたときに報告可能なものは、注意を向けられていないときにも現象的に意識的である」という前提を支持する「現象的内容は注意の変化に対して不変である」という仮説を否定する。イエシュルンとカラスコの成果が正しければ、注意が現象的内容に影響を与えということになり、このような注意の現象的内容からの独立性テーゼは成り立っていないことになる。第二に、この注意についての事実は不確定性解釈に認知科学的な裏付けを与える。不確定性解釈によれば、注意を受けていない文字は不確定な文字一般として、一方で注意されている文字は特定の文字として経験されているのであった。この実験の結果は、注意されていない文字が注意を受け入れることによって、より解像度が高い形で経験され、それによって特定の文字として経験されるようになることを支持しているように思われるのだ。

第三節 スタジッカーの議論の問題点

以上のようなスタジッカーの主張はどの程度正当なのだろうか。私には、第一の主張にも第二の主張にも克服されるべき問題があるように思われる。第一の主張については、イエシュルンとカラスコの実験の解釈そのものが問題である。彼らの実験においては、被験者のパフォーマンスは強制選択推測によって測られていた。しかし、強制選択推測は意識を測る方法としては、無意識的な過程の影響も取り入れて測定してしまう問題があることが示唆されている (Lau 2008, Weiskrantz 1995)。つまり、意識的な模様の知覚が変化したゆえに、被験者のパフォーマンスが向上したのではなく、盲視の事例のように意識に上っていない知覚内容が、被験者のパフォーマンスを向上したという可能性があるのである。意識的な知覚過程を測定する手法としては、強制選択に加えてコメント・キーを押させることで、はっきりと刺激を「見た」のか、それとも単に「推測」しただけなのかを報告させる手法が一般的である (Weiskrantz *ibid.*)。イエシュルンとカラスコが、コメント・キーも彼女らの実験に取り入れていたとしたら、より意識的知覚についての正確な結果が得られたであろうが、スタジッカーが取り上げている実験に関しては、意識的な知覚の効果を測る実験としては、以上のような疑念を払拭することができない。

しかし、イエシュルンとカラスコの実験の効果が、意識的な視覚を理由にして形成された判断によって得られた、と結論付けるのは難しいとしても、注意によってもたらされた効果は、遅かれ早かれ意識に上るタイプの視覚処理であると論じることが可能であるように思われる。あるタイプのタスクにおいて、被験者が高い能力を示すにも関わらず、その意識的な気付きを持っていなかったと考えられる例は、病理的な事例として盲視 (Weiskrantz *ibid.*) や先ほど取り上げた視覚消失、知覚的な行為は行えるが、対象の同定は行うことができない視覚失認 (visual agnosia, Milner and Goodale 2002) がある。また、実験的に作られた状況としては、TMSによる前頭葉の刺激によ

るもの (Lau et al. 2008) や、マスキング・パラダイムによるもの (Lau and Passingham 2007 など) が知られている。これらの事例は、通常の視覚とは異なる経路を用いた知覚であるか (盲視、視覚失認)、注意に問題があるか (視覚消失)、通常の知覚プロセスに人為的な介入を行っているか (TMS、マスキング) のいずれかであるが、一方でイエシユルンとカラスコの実験における模様の知覚にはどれも当てはまらない。唯一の問題は刺激呈示時間の短さ (40 ms) であるが、スパーリングの実験における刺激呈示時間の短さと大きく異なるものではなく、意識的な視覚への大きな障害ではない。むしろ、注意を向けられている対象の知覚は一般に報告可能であり、またそれゆえに意識的だと考えられる点を考慮すれば、イエシユルンとカラスコの実験結果が、無意識的な過程の影響を含んでいた可能性は大いにあるとしても、遅かれ早かれ意識的な知覚の内容に、対応する変化が現れただろうと推定することができる。

また、カラスコらは、その他の注意の現象的内容における影響を測った実験においても、被験者に二つの強制選択課題を遂行させることでパフォーマンスを測っている。例えば、注意のコントラストの知覚にもたらす影響を調べた実験においては、コントラストの異なる二つのガボールパッチを被験者に呈示する (Carasco et al. 2004)。被験者はよりコントラストの高いパッチがどちらであったかということと、そのパッチの傾きが右上がりであったか、左上がりであったかを選択する。そうすると、前のイエシユルンとカラスコの実験と同じ疑念がもたれるように思われるが、実際にはそうではない。現象的差異を確認するのに時間的に隔てられた二つ刺激の知覚像の比較を行わなくてはならないイエシユルンとカラスコの実験とは異なって、この実験では二つの刺激は同時に呈示される。そのため、若干の訓練さえ行えば比較的容易に、注意によってコントラストの意識的知覚が変化することを一人称的に確認することができる⁽¹²⁾。あるパッチはその隣のパッチよりもコントラストが6%低く設定されているのだが、視点を中心の点に固定しながら注意だけを左側のパッチに向けるようにすれば、左右のパッチのコントラスト

がほぼ同じレベルに見えてくるのだ。固視点を維持しながら、注意だけをシフトするのに若干の練習が必要であるが、それさえできるようになれば、誰にでも効果が確認できる。このような一人称的な手法を用いれば、スタジッカーが頼るイエシユルンとカラスコの実験よりも確実に注意と現象的内容との依存関係を明らかにすることができる。

第二の主張についても、イエシユルンとカラスコの実験が意識的な知覚における解像度の増強を必ずしも示しているわけではないという問題点はやはりあてはまる。しかし、上での議論にならつて、イエシユルンとカラスコの実験における注意の影響は意識的に経験されるとしよう。そうすると確かに彼女らの実験の成果によつて、メッシュ論証は反駁されたことになる。また、その結果は不確定性解釈と少なくとも整合的であるので、メッシュ論証が反駁されたとなると、不確定性解釈の方を採用する一つの証拠にはなるだろう。だがそれでもまだ、イエシユルンとカラスコの実験結果と不確定性解釈との間には大きな隔たりがあるように思われる。なぜなら、経験における注意の効果ゆえに、スパリーングの実験の解釈として不確定性解釈をとるべきであると言えるためには、スパリーングの実験におけるいくつかの文字刺激は、特定の文字であることを表象できる解像度が無かった、ということが示される必要があるからである。もしどの文字刺激も特定の文字を表象できる程度に高い解像度を持つて表象されていたにも関わらず報告されないということがあるのだとしたら、それは結局ある種のオーバーフローの存在を示唆しているように思われるのである。十分な解像度を持つていて実際に報告された文字と、十分な解像度を持たなかったゆえに報告されなかった文字という分類の間に、十分な解像度を持つていたにも関わらず報告されなかった文字、というカテゴリにあてはまる文字がスパリーングの実験において無かったということが、どのようにして言えるのだろうか。一見、このようなカテゴリにあてはまる文字があるとすると、それは不確定性解釈にとつて大きな問題となるように思われる。この点については、元々の不確定性解釈を若干弱める方向に修正する必要がある。

元々の不確定性解釈では、被験者の「実際の」報告に基づいて、「その文字の同一性を報告できた文字に関しては特定現象的内容」、「そうでない文字に関しては一般現象的内容」を帰属した。だが、十分な解像度を持っていたにも関わらず報告されなかった文字の存在の可能性を真摯に受け止めるならば、経験における注意の影響を認めたとしても、現象的に意識的な内容とは注意された報告可能な内容であるという主張に留まる。ここで、そのような内容が報告可能な内容であるといえるのは、一般に注意が報告可能性を提供すると言われるからであるが、そもそもそのように言われるのは、注意がグローバルワークスペースへのゲートキーパーであり、またグローバルワークスペース内の情報は報告システムを含む様々な消費システムに利用可能だからである。意識されていたが報告されなかった文字はグローバルワークスペースへの少なくともアクセス可能性を有していた、とすることができるのである。このように弱めてもなお、この立場はブロックのそれとは異なる。ブロックの立場は、注意を向けなければ報告可能にならない文字にまで現象的意識を帰属する。他方でこの立場は、注意の変化抜きに、「今ここで」報告可能な文字にのみ現象的意識を帰属するのだ。

第三章 対立する仮説の検討および想定される反論

第二章では注意と現象的内容との間の緊密な関係によって、オーバーフロー論証を論駁し、同時に弱められた不確定性解釈がよりもつともらしいと論じた。この章ではまず、スパーリングの実験のオーバーフロー解釈に対するもう一つの有力な代案であるポストディクシオン説を検討し、それと不確定性解釈との間の関係について論じる。次に、不確定性解釈に対するブロックの立場やメタなレベルからの更なる反論を想定し、これに応える。

第一節 ポストデイクション説

ポストデイクション説は、フィリップスによつて最近提唱えられた立場である (Philips forthcoming)⁽¹³⁾。この立場は、不確定性解釈と同様にキューが経験の内容から独立であることを疑った立場であるが、二つの立場において大きく異なるのが、不確定性解釈はキューが注意を引き付けて、それによつて特定の行に属する文字がより確定的に経験されるようになった結果、それらの文字が報告可能になると論じるのに対して、ポストデイクション説は、キューがある意味で時間遡行的に経験に影響を与えると主張する。部分報告パラダイムの高音のキューが与えられる試行においてはキューの呈示以前から上の行の文字がより確定的に経験されていた、と考えるのである。客観的な世界においては、キューは刺激の呈示よりも後の出来事である。しかし、経験世界においては、刺激の経験内容に未だ無意識的なキューの知覚が影響を与えていると考える立場なのである。

フィリップスは、この主張は一見反直観的に思われるが、その他のポストデイクションが起きているとされるケースとの類似を考えれば、むしろスパーリングのケースにおいてもポストデイクションが起きていると考えるべきであると主張する。代表的なポストデイクションの例はメタコントラスト・マスキングである。メタコントラスト・マスキングパラダイムにおいては、通常二つの刺激が呈示され、時間的に後の刺激の知覚プロセスが、意識に上る前の時間的に先行する刺激の知覚プロセスを上書きした結果、時間的に後の刺激だけが被験者によつて経験されると言われている。このような典型的なメタコントラスト・マスキングとスパーリングの実験との間にはいくつもの相違点がある。典型的なメタコントラスト・マスキングが単一様相内の効果であるのに比べて、スパーリングの実験は、複数の感覚様相が関係している。また、メタコントラスト・マスキングが比較的低次の視覚処理の効果であつて認知が関わらないとされているのに対し、スパーリングの実験では注意が関与していると考えられている。こ

のような相違点に対してフィリップスは、それぞれ感覚様相をまたいで起こるマスキングや、注意がマスキングに影響を与えるとする成果を引き合いにだし、またマスキング以外のポストディクションの事例を数多く挙げて、スパリーングの実験においてもポストディクションが起きているはずだと主張する。

フィリップスはまた経験の本性に鑑みて、経験はスナップショットの連続ではなく、そもそもある程度の時間幅を最小単位として持っていると考えるべきだと主張する。彼は例として、歩いている人を見るという経験と走っている人を見るという経験の違いに訴える。ある時間断片だけをとりだせば、歩いている人と、走っている人が全く同じ姿勢をとっているということは可能である。そのような時間断片だけから、その人が歩いているか走っているかを決めることはできない。それゆえ、歩いている人を見るという経験と走っている人を見るという経験が存在しているならば、それらの経験は互いを区別できるだけの時間幅を必然的に持つていなければならない、ということなのである。このような考察からフィリップスは、スパリーングの実験においても、被験者の刺激の経験とキューの経験は別々のものではなく、刺激＋キューで、時間幅を持った一つの経験を構成している、と主張するのだ。

私は、経験がある程度の時間幅を持っているという提案や、ポストディクション現象そのものは意識の科学や哲学における非常に重要な話題であろうということは確かであろうと考える。また、それらがスパリーングの実験においても何らかの形で働いているかもしれないことは異論はない。しかしそれが、注意とは独立にスパリーングの実験におけるオーバーフローを説明し去る形で働くことができるかどうかについては、大いに疑問の余地がある。

第一に、なぜある種の経験が時間幅を持つているとしても、刺激とキューとを合わせて一つの経験として扱わなくてはならないのが明らかでないように思われる。我々には、どのようなキューを与えられたときにも、刺激の呈示の経験自体は共通していたという直観がある。そのような直観を裏切つてまでそれらを一つの経験として扱わなくてはならないのはなぜだろうか。また、フィリップスが議論していないメタコントラスト・マスキングとスパ

ーリングの実験の間の相違点も類似の疑問を起こさせる。そもそもメタコントラスト・マスキングにおいては、第一の刺激は上書きされてしまったために経験されないが、スパーリングの実験では文字刺激も、キューも経験されているのである。そのような際にはやはりそれぞれ別の経験として扱うのが適切であるように思われるのである⁽¹⁴⁾。

第二に、結局注意による決定性の変化を用いなければ、ポストディクシオンによる説明はオーバーフロー論証を論駁することはできないように思われる。フィリップスは、スパーリングのケースにおいて注意が関わっているということを認めており、また、被験者の全ての文字を見たという報告を説明するために、フィリップスは特定現象的内容と一般現象的内容の区別を導入している。その区別は不確定性解釈によれば、注意の働きによって説明されるものであった。被験者の報告のメッシュ論証に占める役割の大きさを考えれば、結局注意の働きを考えることは、ポストディクシオン説にとつても必要不可欠なのである。さらには、仮に第一の問題をクリアして、刺激とキューとを合わせて一つの経験として扱うべきであるということになったとしても、それがなぜオーバーフロー解釈を否定するような形で経験の変化をもたらすのか、ということの説明するには結局注意による効果を導入せざるを得ないように思われるのである。だがこのことは同時に、不確定性解釈と時間幅仮説が両立可能であることを示している。標準的な不確定性解釈は、時間幅仮説をとっていない。つまり、標準的な不確定性解釈によれば、注意が引き付けられるとそれによつて経験の内容が変化する。他方で、標準的な不確定性解釈に加えて時間幅仮説を採用するという立場もありうる。フィリップスの立場は実質的にはこの立場に相当すると考えられる。この二つの立場のどちらがより優れた立場なのかということを決めるのは少なくともここでは難しい。経験が時間幅を持つという主張は少なくとも議論の余地のある主張であり、誰もが手放しに賛成するものではない。ある問題を解決するのに、それと同じ程度に議論のある立場を持ち出すのは一般的にはあまり得策ではないだろう。だがしかし、フィリップスの立場が標準的な立場よりも優れているといえる点もある。

第一に、ブロックは不確定性解釈に対して、もし注意による経験の変化があるならば、なぜ被験者はその経験の変化に気づかないのだと批判した (Block 2007, p.522) が、経験の時間幅仮説が正しければ、そもそも経験の変化が無いのだからそのような批判は的外れだ、と答えられるという点が挙げられる。第二に、第二章第一節で触れた不確定性解釈の反直観的な側面を和らげる可能性が挙げられる。不確定性解釈は、人々の持つ経験の豊かさについての直観を裏切るという側面があった。しかし、もし時間幅仮説が正しければ、不確定性解釈が帰結するような不確定な経験は、あまり一般的なものではないということになるかもしれない。我々は、日常的な知覚経験において、視点をあるところに固定させられたりはしないし、しかもそのまま注意を別の場所に向けると教示されたりもしない。不確定な内容を持つ経験は、実験室において操作された極めて異常な種類の経験であって、歩行の視覚経験と走行の視覚経験の違いの例でも明らかのように、日常的には我々は常に目線や注意を頻繁に動かしつつ一つの経験を形作っている。それぞれの時間断片で見れば貧しい情報しか持たなかったとしても、ある程度の時間幅を持った経験は、それよりもずっと豊かな内容を持ちうるのである。

この節ではフィリップスのポストデイクション説について検討した。私の診断では彼の立場は、不確定性解釈と対立する見解というよりは、それと両立可能な盟友的な立場である。標準的な不確定性解釈よりも、フィリップスの立場の方が優れている点もあるが、経験の時間幅仮説がそれほど確立された立場ではないことを考えると、どちらが優れているかについて決定的なことをここでいうことはできない。

第二節 ブロックやその他の立場からの再反論

前節ではフィリップスの立場は、オーバーフロー説の代案となる説明としてはあまり重要ではないが、不確定性

解釈と組み合わせることで、より説得力のある提案となりうることを示した。ここでは更に、ブロックの立場からの再反論を考慮することでより不確定性解釈を確かなものとしたい。まず、ブロックは、不確定性は表象内容に存し現象的内容には存しない、とすることができるとは思えない。この反論はやや異なる文脈で実際に、ブロックが行っているものである (Block 2010)。ブロックによれば、現象的意識は心的絵具のようなもので構成されており、不確定であるのはその心的絵具が現実のどのような性質を表象するのかということだけであって、現象的意識そのものではないのだ。

しかし、このブロックの応答はそもそも、表象内容を超えた心的絵具の实在を前提としている。このような心的絵具の实在は、そもそも主観的な観点からは示すことはできない。なぜなら、ブロックの主張が正しければ、クラウディング効果のときのように、主体が最善を尽くしても表象内容を確定できず、かつ被験者自身にとつて何が見えて、いるのかも判然としないと証言するときでも、現象的内容は確定されることになるからだ。このような想定は、主体への現れとしての現象的意識という側面を裏切っていると言えるが、ここではまだそのような現象的意識が存在しうると仮定しよう。それでは、心的絵具の实在は経験的な観点から示すことができるだろうか。このような手法としての第一の候補は、メッシュ論法であろう。だが、現在はメッシュ論法への反論に対する再反論として心的絵具に基づいた応答を行っているので、ここでメッシュ論法を持ち出すのは論点先取である。また、ブロックが想定するような、注意の効果が働かない心的絵具は、注意が極めて初期の視覚プロセスから高次の視覚システムに渡るまで様々なレベルにわたって影響を与えている (Kahneman 2010) ことを考えると实在性が大きく疑われる。以上のように、表象内容を超えた心的絵具の存在は、一人称的観点からも客観的観点からも示すことはできない。以上の議論が正しければ、現象的内容は表象内容と同一であるか、少なくともそれにスパーヴィンするようなものであることになる。しかしこれを認めてもなお、注意は表象内容の決定要因の一つであるが、それは外的要

因であると考えて、注意は現象的内容に「因果的に」影響を与えるだけであって現象的内容を構成はしない、というように論じることができるかもしれない。注意の現象的内容における影響についての経験的成果は因果的な用語を用いて記述されているので、必ずしも注意が現象的内容を構成すると解釈する必要はないのかもしれない。

このような反論が説得力を持つかどうかは、そもそも構成関係をどのように理解するかに関わってくる。一般に、構成関係には同一性が必要であるという見方とそのような強い関係は必要ないという見方がある。前者のような見方をとる論者は、ある粘土で出来た像の右腕が別の粘土でできたものと交換されたり、右腕が無くなったりしたら、その像はそれを構成する粘土が変化したために、もはや元の像と同じではないと考える。このような見方をとる論者ならば、前の章で触れたカラスコラの注意のコントラストへの影響についての成果 (Carrasco et al. 2004) は、まさに注意は現象学を構成していない、という証拠であると考えらるであろう。なぜなら、その実験において注意されたパッチは、注意されていないパッチと同じコントラストに見えていたからである。部分的とはいえ同じ現象的内容が異なった注意の状態によって実現されるならば、このような論者は、注意は現象的内容を構成しないと考えるだろう。だが我々はそもそも必ずしも構成関係を同一性のような強い関係性としてとらえる必要はない。ニューヨーク市のスーパーでクラフト社のクリームチーズが6ドルで、ボストンのスーパーでも、同じものが同じ価格で売っていたでしょう。いずれのケースにおいても、消費税はクリームチーズの価格を構成するというのはもつともな主張のように思われる。だが、ニューヨーク市の消費税率は八・八七五%、ボストンの消費税率は六・二五%である⁽¹⁵⁾。このように、商品の価格の場合は、全く同じ価格が異なる消費税率によって実現されていたとしても、消費税は商品の価格を構成しない、ということとは言われない。なぜだろうか。それは消費税を加算するというプロセスが、商品の価格を決めるプロセスにおいて欠かすことのできない過程だからである。同じように、異なる注意の状態によって、同じ経験が実現されていたとしても、そのことは注意が経験を構成しないことの理由にはならない。ある対

象あるいは空間における注意の状態がどのようなものであるかというのは、その経験の内容を決める際の必然的な過程の一つだからである。

最後にやや異なった立場からの反論を取り上げてこの章を締めくくりたい。ある種の論者は、意識的经验は常に報告可能であるか、という問題はそもそも疑似問題であると考える⁽¹⁶⁾。また、ヒラリー・パトナムもこの問題について、「克服されるべき事例としてよりはむしろ制定されるべき事例として扱われるべき」(198、邦訳一四二頁)と述べている。これらの論者によれば、意識的经验は報告可能性を常に含意すると考えてもそうではないと考えても、全く同様の説明を行うことが可能なのであり、どちらかの仮説に優劣をつけることはできないということになる。本稿を通じて主張してきたのは、そのような主張は拙速であり、その説明的等価性は誤った理論的前提に基づいているということである。すなわち、そのような説明的等価性が成立するのは、報告可能性そのものが現象的内容そのものに対して何ら影響を与えない場合に限られる。しかし、それは誤りであることが、報告可能性を提供する注意が現象的内容を変えらるということによって示された。この事実を否定するということは、一人称の主観の届かぬ領域に現象的意識を追いやらるということである。そのような立場が不可能であるとは言えないまでも、そのような立場は我々の素朴な現象的意識理解の核となる部分を裏切っている。そのような立場をとる説明上の利益が示されぬ限り、現象的意識は報告可能なものである、とする立場が勝者である、と言えるであろう。

結論

本稿ではネッド・ブロックのメッシュ論証が成功していないことと現象的意識が報告可能性を超えて出てはいないことが、注意と経験との間の構成的な関係を論じることによって占めされた。ブロックは被験者の自身の経験につ

いての報告に頼って、論証を進めるがそれは被験者の報告やスパーリングの実験結果の唯一の解釈方法ではない。また、ブロックは注意と現象的内容が独立しているという誤った前提をもとに論証を行っていることを示した。現象的内容が実は不確定であり、その不確定性に注意が構成的な働きを持っていると論じること、スパーリングの実験に対するより良い解釈を提供することができるのである。

参考文献

- Baars, B. (2001). *In the Theater of Consciousness: The Workspace of the Mind*. Oxford University Press.
- Block, N. (1995). On a Confusion About a Function of Consciousness. *Behavioral and Brain Sciences*, 18, 227-87.
- Block, N. (2000). How Not To Find the Neural Correlate of Consciousness. *Intellectica*, 31, 125-36.
- Block, N. (2007). Consciousness, Accessibility, and the Mesh Between Psychology and Neuroscience. *Behavioral and Brain Sciences*, 30, 481-548.
- Block, N. (2009). Comparing the Major Theories of Consciousness. In Gazzaniga, M. (eds) *The Cognitive Neurosciences 4th Edition*, 1111-122.
- Block, N. (2010). Attention and Mental Paint. *Philosophical Issues*, 20, *Philosophy of Mind*, 23-63.
- Byrne, A., Hilbert, L., Siegel, S. (2007). Do We See More Than We Can Access?. *Behavioral and Brain Sciences*, 30, 501-2.
- Carrasco, M. (2009). Attention, Psychophysical Approaches. In *The Oxford Companion to Consciousness*, 78-83.
- Carruthers, P. (2000). *Phenomenal Consciousness*. Cambridge University Press.
- Carrasco, M., Ling, S., & Read, S. (2004). Attention alters appearance. *Nature Neuroscience*, 7, 308-13.
- Chalmers, D. (1998). *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*. Oxford University Press.
- Dehaene, S., Kerszberg, M. & Changeux, J.-P. (1998). A neuronal model of a global workspace in effortful cognitive tasks. *Proceedings of the National Academy of Sciences USA*, 95, 14529 - 34.
- Dehaene, S. & Naccache, L. (2001). Towards a cognitive neuroscience of consciousness: Basic evidence and a workspace framework. *Cognition*, 79(1-2), 1 - 37.

- Demmett, D. (1995). *Consciousness Explained*. Back Bay Books.
- Demmett, D. (2002). How Could I Be Wrong? How Wrong Could I Be?. *Journal of Consciousness Studies*, 9(5), 13-6.
- Grush, R. (2007). A Plug for Generic Phenomenology. *Behavioral and Brain Sciences*, 30, 504-5.
- Kasner, S. (2010). Attention, Neural Basis. In *The Oxford Companion to Consciousness*, 72-8.
- Landman, R., Spekreijse, H, Lamme, A.F. (2003). Large Capacity Storage of Integrated Objects Before Change Blindness. *Vision Research*, 43, 149-64.
- Lau, H. (2007). Manipulating the Experienced Onset of Intention After Action Execution. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 19(1), 81-90.
- Lau, H. (2008). Are We Studying Consciousness Yet?. In Weiskrantz, L. and Martins, D. (eds) *Frontiers of Consciousness*. Oxford University Press, 245-58.
- Lau, H., Passingham, R., (2006). Relative blindsight in normal observers and the neural correlate of visual consciousness. *PNAS*, 103, 18763-8.
- Milner, D., Goodale, M. (2002). *The Visual Brain in Action*. Oxford University Press.
- Merleau-Ponty, M. (1944/2002). *Phenomenology of Perception*. Routledge. (M. メルロー＝ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎・小木貞孝訳、一九六七年、ちち書房)
- Patnum, H. (1981). *Reason, Truth and History*. Cambridge University Press. (コヒリー・パトナム『理性・真理・歴史』野本和幸・三上勝生・中川大・金子洋之訳、一九九四年、法政大学出版局)
- Philips, L. *forthcoming*. Perception and Iconic Memory. *Mind & Language*.
- Sperling, G. (1960). The information available in brief visual presentations. *Psychological Monographs: General and Applied*, 74 (11, Whole No. 498), 1-29.
- Stazicker, J. (2011). Attention, Visual Consciousness, and Indeterminacy. *Mind & Language*, Vol. 26, No. 2, 156-184.
- Weiskrantz, L. (1995). *Consciousness Lost and Found*. Oxford University Press.
- Van Gulick, R. (2007). What if phenomenal consciousness admits of degrees?. *Behavioral and Brain Sciences*, 30, 528-9.
- Vuilleumier, P., Rafal, R. (2000). A systematic study of visual extinction. Between- and within-field deficits of attention in hemispatial neglect. *Brain*, 123, 1263-79.

Yeshurun, Y., Carrasco, M. (1998). Attention improves or impairs visual performance by enhancing spatial resolution. *Nature*, 396, 72-75.

Yeshurun, Y., Montagna, B. and Carrasco, M. (2008). On the flexibility of sustained attention and its effects on a texture segmentation task. *Vision Research*, 48, 80-95.

註

- (1) 本稿では経験ということで、意識的経験を意味する。このことは多くの論者にとっては同語反復的であるが、一部の論者は意識的経験と無意識的経験を分けて用いている(例えば、Carrubers 2000)。
- (2) グローバルワークスペースについては、Baars 2001, Dehaene et al. 1998, Dehaene and Naccache 2001 を参照。
- (3) 現実中存在する事例で、現象的意識抜きのアクセス意識に最も近い実例としてブロックが唯一挙げているのが、逆アントン症候群 (reverse Anton syndrome) である (Block 2000, p.128)。逆アントン症候群の患者は、アントン症候群の患者が、機能的には全く見えていない、すなわち識別タスクにおける能力がチャンスレベルであるにも関わらず、自分は見えていると主張するのに対し、逆アントン症候群の患者は、特定の視野において、文字や顔を認識できるにも関わらず、見えていないと主張する。ここでは詳しく述べないが、逆アントン症候群が本当に現象的意識抜きのアクセス意識の実例なのかについては議論の余地がある。特に、逆アントン症候群が注意の障害も伴っているならば、ブロックの分類においては、むしろ後で述べる視覚消失の例に近く、アクセス意識抜き現象的意識のケースであると考えるべきなのではないかという疑問が生じる。
- (4) しかし、この一見した非対称性はブロックにとつては必ずしも問題ではない。この章の残りの部分で詳しく論じるように、ブロックの描像においては結局、ある状態が現象的意識的であることは、アクセス意識を持つための必要条件になっているからである。メッシュ論法におけるブロックの主張では、現象的意識の内容の一部だけがグローバルワークスペースに送られ、報告可能になる。もし、現象的に意識的でないような視覚からグローバルワークスペースに到達する経路が無いとすると、結局現象的意識はアクセス意識よりもプロセスとして先立っているということができる。そうすると、ある心的状態が現象的に意識的であることはアクセス意識の必要条件になっており、それが正しければ、現象的意識抜きのアクセス意識など現実に見つかるはずがないのだ。
- (5) しかし、冒頭や結論部では、「見る」という言葉を使っており、スパーリング自身もブロックの主張に賛同するだろうとは推測

できる。

- (6) 具体的には‘Landman et al. 2003’ Stigle et al. 2008。本稿ではこれらの成果について論じないが、これらについての批判的検討は、Philips forthcoming, 6.を参照。

- (7) ブロックを初めてとする多くの英米系の心の哲学者は、単に「現象的意識に現れる内容」という意味で‘phenomenology’、という語を用いる。しかし、‘phenomenology’、という語の通常の日本語訳である「現象学」は、しばしばフッサールに端を発する哲学の一大流派、あるいはそれにおけるテクニカルタームを指すと解されるので、本稿ではそのような誤解を避けるために、しばしば‘phenomenology’や‘phenomenal character’と入れ替え可能な形で用いられる、‘phenomenal content’の訳語である「現象的内容」という表現を採用することとした。しかし、現象的内容は少なくとも第一義的には表象内容のことではない。現象的内容とは、我々が現象的意識において直接見出す何か、のことであり、それが表象説の論者が言うように、真偽の評価の対象になるかどうかは、更なる問題である。

- (8) 本稿では詳しくは論じないが、ブロックが挙げている神経科学的証拠も、反ブロック流（例えば、後に説明する不確定性解釈流）に解釈することができる。というのもブロックは人間の脳の構造や機能についての新しい主張を行っているわけではなく、ある特定の意識に関する立場の観点からの神経科学的な証拠の解釈を呈示しているだけだからである。意識について反ブロック的な立場の論者は、同じ神経科学的内容と一般現象的内容はそれぞれ specific phenomenology と generic phenomenology の訳語である。このような訳語を取った理由は、注8と同様である。

- (9) 特定現象的内容と一般現象的内容はそれぞれ specific phenomenology と generic phenomenology の訳語である。このような訳語を取った理由は、注8と同様である。
- (10) まとめとしては Carrasco 2010 を参照せよ。

- (11) 注意によるこのような強調が働く次元は、コントラスト、空間的な頻度、間隙と対象のサイズ、刺激の色の鮮やかさなどがこれまでに知られている。だが、色合いについてはこのような効果が起こらないことも知られている。

- (12) 実際の刺激は Carrasco 2004, p. 310, Figure 4. カラスコの研究室のホームページからも同論文はダウンロードできる (<http://www.psych.nyu.edu/carrascolab/publications/CarrascoIngrRead-04.pdf>).

- (13) フィリップスはこの論文によって、国際意識科学会 (ASSC) において、二〇一一年度のウィリアム・ジェームス賞を受賞した。
- (14) フィリップスは、マスキングのように時間的に先行する刺激が消えてしまう例だけではなく、時間的に先行する刺激が後の刺激

と合わさって一つの経験を作るといふような例も出している。例えば、二つの丸い模様が交差する映像と、衝突音との二種類の刺激を被験者に与えた場合、二つの丸い模様が交差する瞬間よりも音が与えられる瞬間がかなり後方にずれていたとしても、丸い模様の交差の映像は、二つの丸の衝突として被験者に体験される。しかしこのような例の場合、二つの刺激が一つの経験を作るのは、現実世界において二つの丸が衝突するといふ出来事が実際によく起こるからだと考えられる。しかし、スパーリングの実験のようないくつかの状況において、なぜ両者が一つの経験として経験されなければならないのかはやはり明らかではない。

- (15) アメリカの消費税のシステムは非常に複雑である。実際にはポストンでは食品はさらに税の軽減措置があるが、話を単純化させるためここでは食べ物にも5%の税金がかかるとしよう。

- (16) 東京大学大学院総合文化研究科の太田紘史氏も同様の問題を提起してくださった。